

KODAK COLOR CONTROL ATTACHMENT  
© The Timken Company, 2000

LICENSED PRODUCT  
Black

3/Color  
White

Magenta

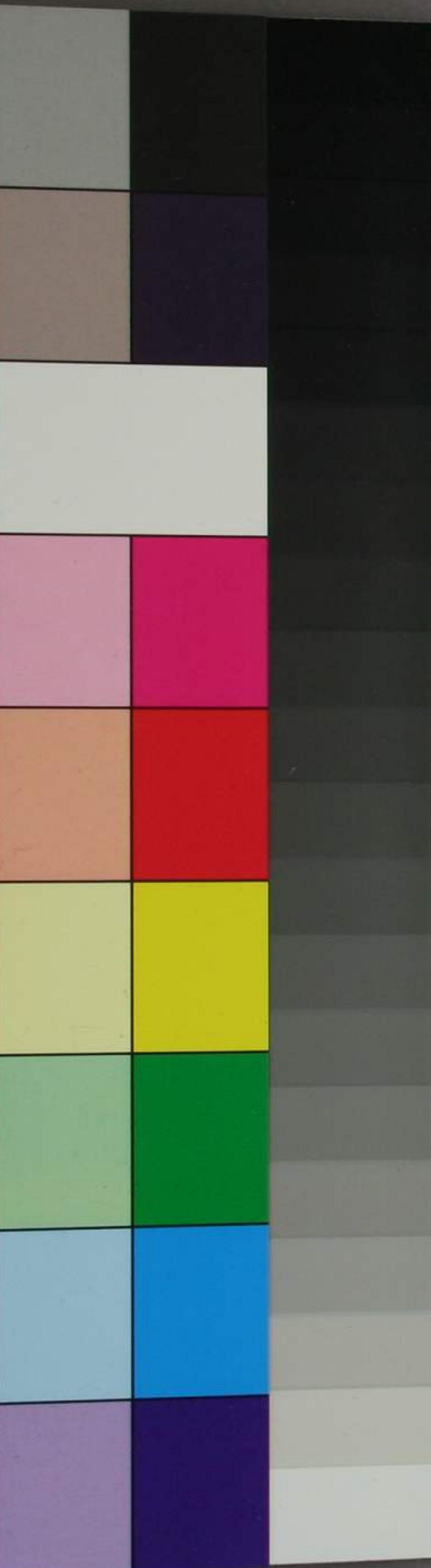
Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN TAJIMA

卷之三

卷之三

大二

卷之三

明治廿一年十月一日 千葉彌藏贈



名内や柳の  
ねをとくへゆく

嵐雪

第十九套

卯月の翔雲雀

鏡山の朝雲雀

鏡山の朝雲雀

第十套

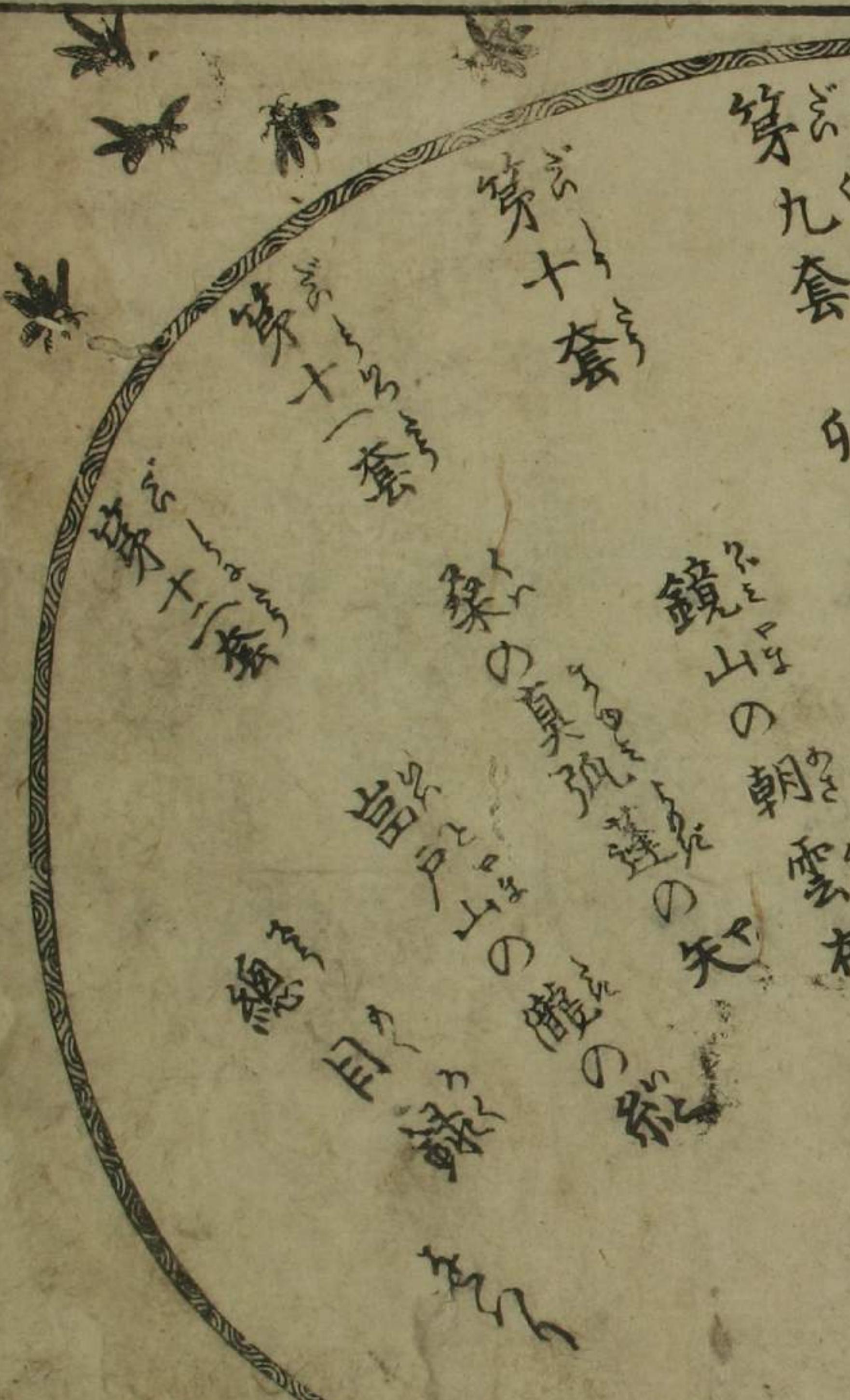
桜の東風

山の東風

山の東風

第十一套

桜の東風



雲のくわよ



妙神上人

逢事者雲井  
遙丹鳴神乃  
音丹闕筒戀  
豆鉢



雲絶間卷二

圖すとどろの獸けあ

震雷記じんらいき

書小云しょこひ

明和二年めいわにねん

七月廿二日しちがつにじにち

相列さうれつ

大山おほとけ

落土人らくどじん

捕つか

東都とうぶ

小山こさん

両りょう

狹猫せうねこ

略りゃく

馳き

似そ

毛け

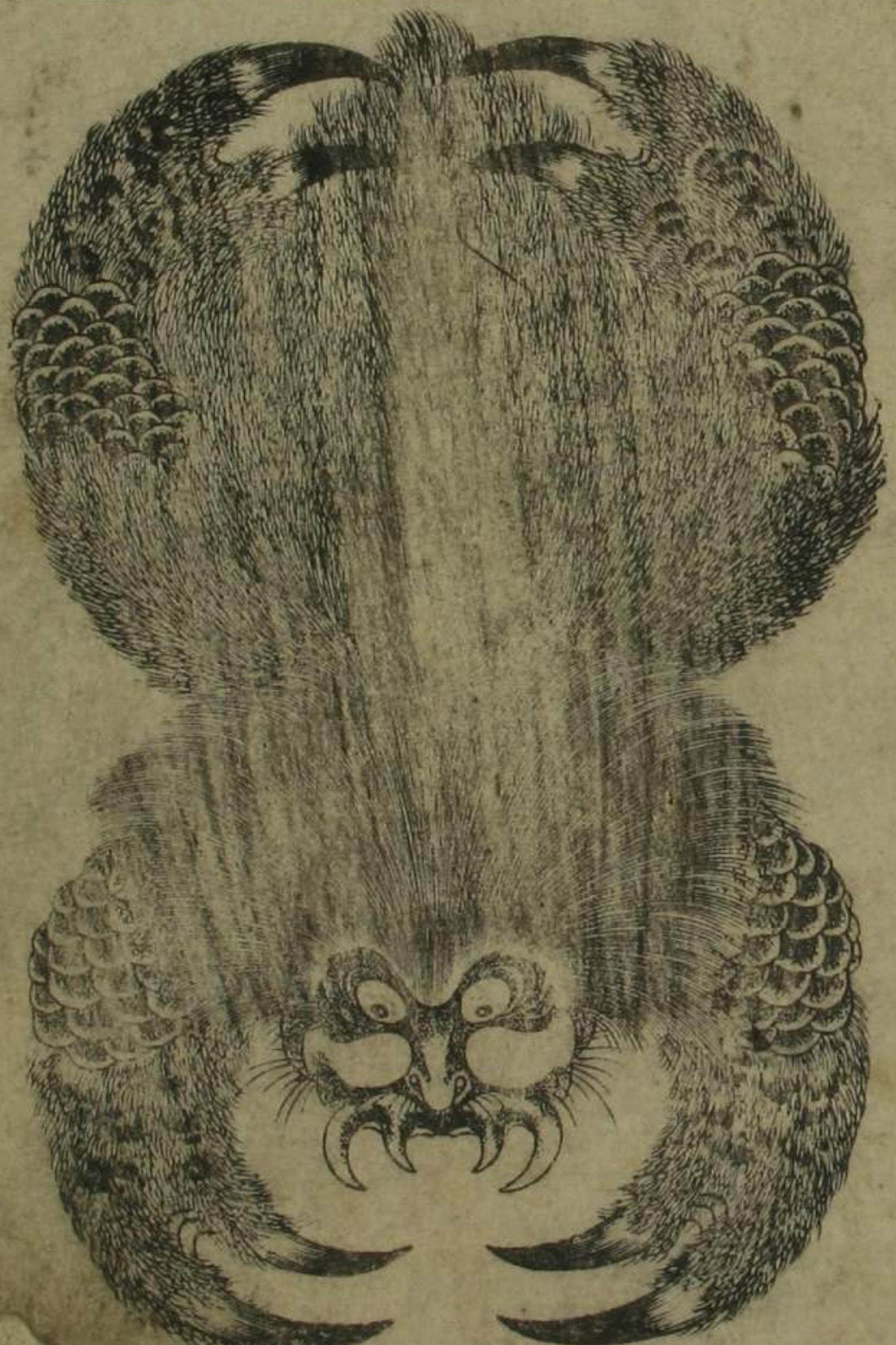
鰐わい

本ほん

其二

今接する小信濃こいのしの  
の名考めいこう

又記また其の舊きのの雷らい



○又一種ハ近曾浪  
速人の役已えんら用田次  
革とひのりの小え  
す。と書小云享  
和元年五月十日此  
獸藝けい九日市いちま  
塩龜しおう落おちて死しす。  
太お尺山せきざん立たつとと。

今接する群書纂要くんしょもんよう  
の雷公らいこう  
猪いのしの首くびと各兩ごくにの指さみみととああれ

卷之二

あるべからど。お近い  
を出でて證とひ。

らへとモリカノニヨ  
○雷鳥ハ加賀国  
ウツクシアキハヨシカヘ  
石リ郡白山産見ヘ

社の中 小あり。の山  
よ雷といふ虫あり。秋

蛙の子。你の鳥好  
い。虫を食ふ奴

らへらう  
雷鳥

一  
謝鶲の虫の名うる  
を杜鵑をも又謝

翠  
豹とよどりの子  
ちひき  
雷鳥の大サカ

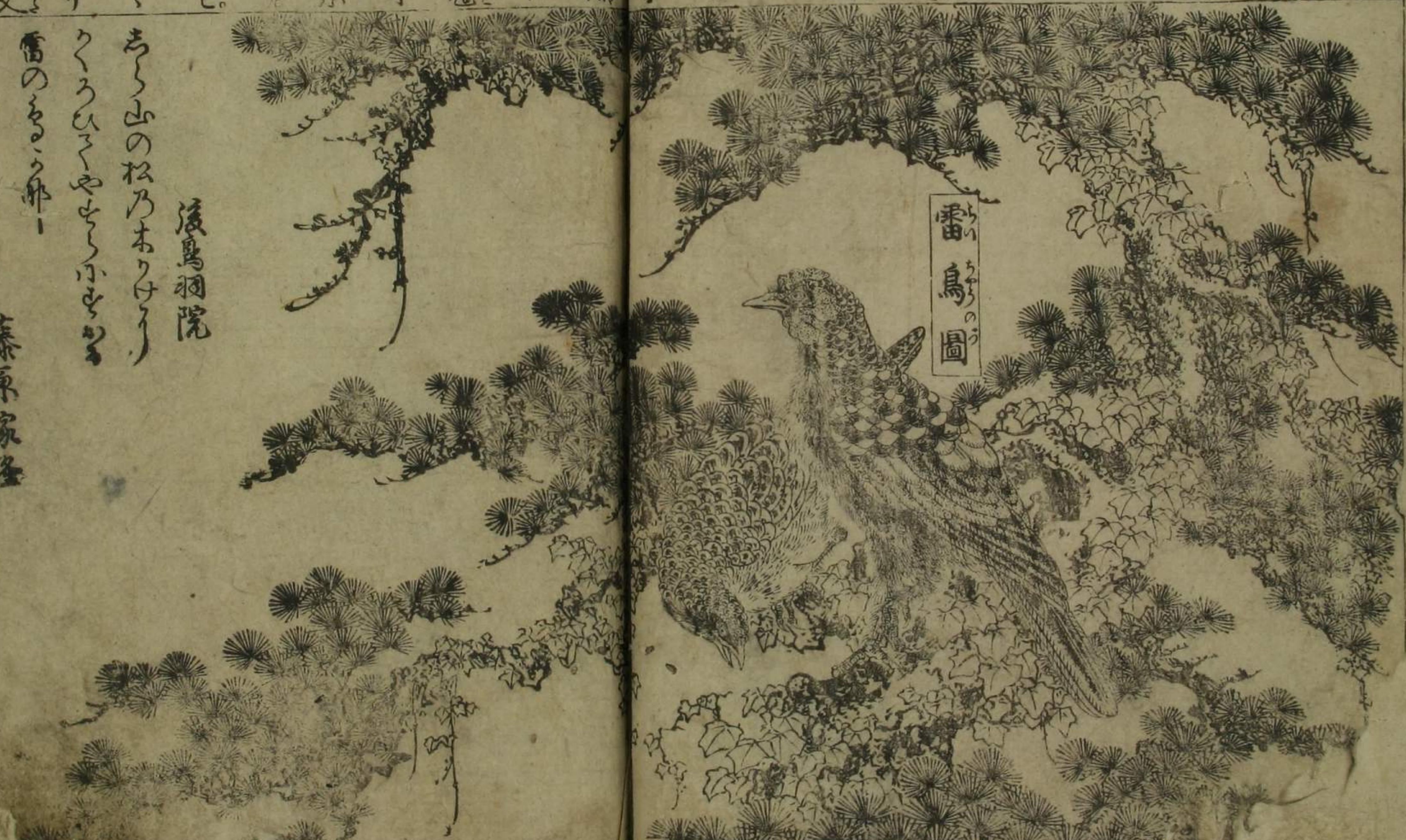
のぢく。形も又體小  
類。一。首ハ雞の雌。

似て少許難波あり  
モハ黒毛相難波モ

墓石鶴とひの  
おとくの足よもや

二。彼外の今アリ。

卷之四



雷鳥圖

淡島羽院

あら山のね乃おりけり  
くろひそやもくらむ  
雪のものか  
藤原家隆

雷の鳴と見小雲のうを遊行。雷霆と共に落る獸を嘆み雷  
和名鉄神吳類小雷公一名ハ雷師和名伊加豆知一云奈流加美  
今の大又と見ゆる是も王充が論衡云画へ雷公の狀を圖ヒ連鼓の聲  
似テ入られを極ヒ又李肇が國史補云雷州小雷獸大ト人そく食ヒ  
又干宝が搜神記云晋の扶風ニ楊道和ありひりのゆり夏辟靈衆の廟  
の下ニ震ふ道和鉗を以て股を折テ遂ニ逃亡去てあらば震  
の玉。眼鏡ニ似テ毛角長大と云餘形六畜小似テ頭猕猴ニ似テ  
と云入謝在枕か立雜俎よ雷の取人常ニ見る所あり大約雌雞小似  
翹あり。又鷹首奮撲とたひ声を佐ヒ。夫古人の雷公之說や必一も同  
或ハ人ニ似テウソリヒ或ハ猴ニ似テウソリヒ或ハ雞ニ似テウソリヒ性  
本邦の諸雜書小雷公の圖說を載ヒされ亦云秋の至ニ異うるを云。雷  
獸ニ種類ナヒナレ誣ヒモ太佐山中信濃の深山安房の二山有之。春  
の間雷獸を捕ヒ。捕ヒられを食ふと云ア。又李肇が說ヒ又誣ヒ。震  
雷記云雷ハ陽氣也氣を誇フニ奇ニ比中ニ硫黃焰消リテともニ升  
天ニ到。天陽の天火られ小衆トニ空中ニ交ヒ。忽發声奔騰トニ  
則造化の火猿ニ又別ヒ。此の火氣を以ヒ獸あり。雲中を移シ。遇人或ヒ  
雷電と獸トハ一物スアリ。世の經籍ニ載す所火を食ハ雞火ニ走  
氣雲中ニ走ヒ。鳥ニ之の類ナリトシテ。同書ニ亦云或人に曰正  
雷鳥ハ大明一統志ニ載すところの松雞ナリト云ア。古本ニハ松雞ニ云  
校正の本ニハ鶴雞トあり。この鳥ニ之ニ松を栖ヒトキナム。松雞  
欲されハ秋子ナリ。松を詠ヒアリ。又云雷鳥ニ  
と云。野雞ニ似テ。予られを北國の人ニ問。鳩ニ類ヒトキナム。

すの外へ北國人の説を取り。夏の夜電のする方、滅向上へうえ動く。晴  
傷を甚てなままでかむ。故に數目とあるものあらざれを治する小玉蜀の穀を  
貯め。写本雷震記より云。雷は數目とするもの二へあり。俯してる  
た仰ぐるのみの元也。とひて雷のいきく鳴とたひうがよきと在へる。利  
老人の云。雷は數目して昏絶する者のみの人を仰さまはして。宿る難を而  
置。難動搖すれば即ち蘇生と。又雷火は肉を敝られず。降真香を拂て  
そく煙ふく。塘口の扇愈雷を怕らん。陰餘ありて陽足がるが故に。す  
て彼人の造化の迹を論じる。胡明仲も勝れり。予その説をよみすとを、  
八十数三を挙ぐ。其理ひずかれて益ゆべれば。今鳴神法師が小説を作り、  
世の童子よ示しめり。迅雷の聖者もおそれぬ。うれしも深く。明鑑も、  
忌むことの症の陰陽虚實であるのを亦咎めし。丁卯本の卷頭に、

雲妙間雨夜月卷之一

東都曲亭馬琴編次



第一套 神崎の假の宿

近に圓愛智郡觀音寺の城へ。佐々木判官氏頼。年才僅小十一歳。すりりる。  
建武三年某の月。ちトやくことを頃で。すりり。宇山愛智川の圓民屋敷  
達つて。敵意もとあく。華格はあらず。そのころ同郡ある。武佐の山里小畠田武平  
とがふ鶴夫ありたり。元来大慈を悲の自徒すじり。後世のふるへ。あら  
まちどく。只且とも暮暮ても黙禱をめぐらし。物の命をとまじくとふ。と  
ゆゑをあらび。かく報ひよ。年の齡五十といふ春。す。此病よあらざれ。苦悽と日  
づくふと。嘆息ふぞえ。とあらくる。武平が妻へ先づまづく。す  
すうす十二歳よされり。それを調續せん親族もある。

程小道隣人。加ち郎を憐る。父母の後世をも吊り持つて。彼を法師とせむ。ほんたよ。

すもぞよとて。武佐の長光寺小ねくゆれし。彼を法師とせむ。ほんたよ。  
ひとえいふ。住持こうろよく差引く。この日より寺小娘。次の年品を  
らうやもつ。わきまえみる。さび。帛よ祝髪さへ。法名西智と賜て。西智へ長光寺小あつと。年  
よゑび。道かうと堅固す。鷺の林の茂みをまた。鷺の嶺の高紀  
を仰ぐ。出離生死の要道を終すると。ひと切めりとども。つべーと。執  
うを首ひだ。父ひすれ。攜夫よ。その元がまくよ。じくねひ。へき。素生を名  
へて。帰敬す。とすくもよ。華流宝閣の妻。小生す。許まの徒弟を扶助。  
一切衆生を脩度せん。あくまで。故御を離れこそ。夙

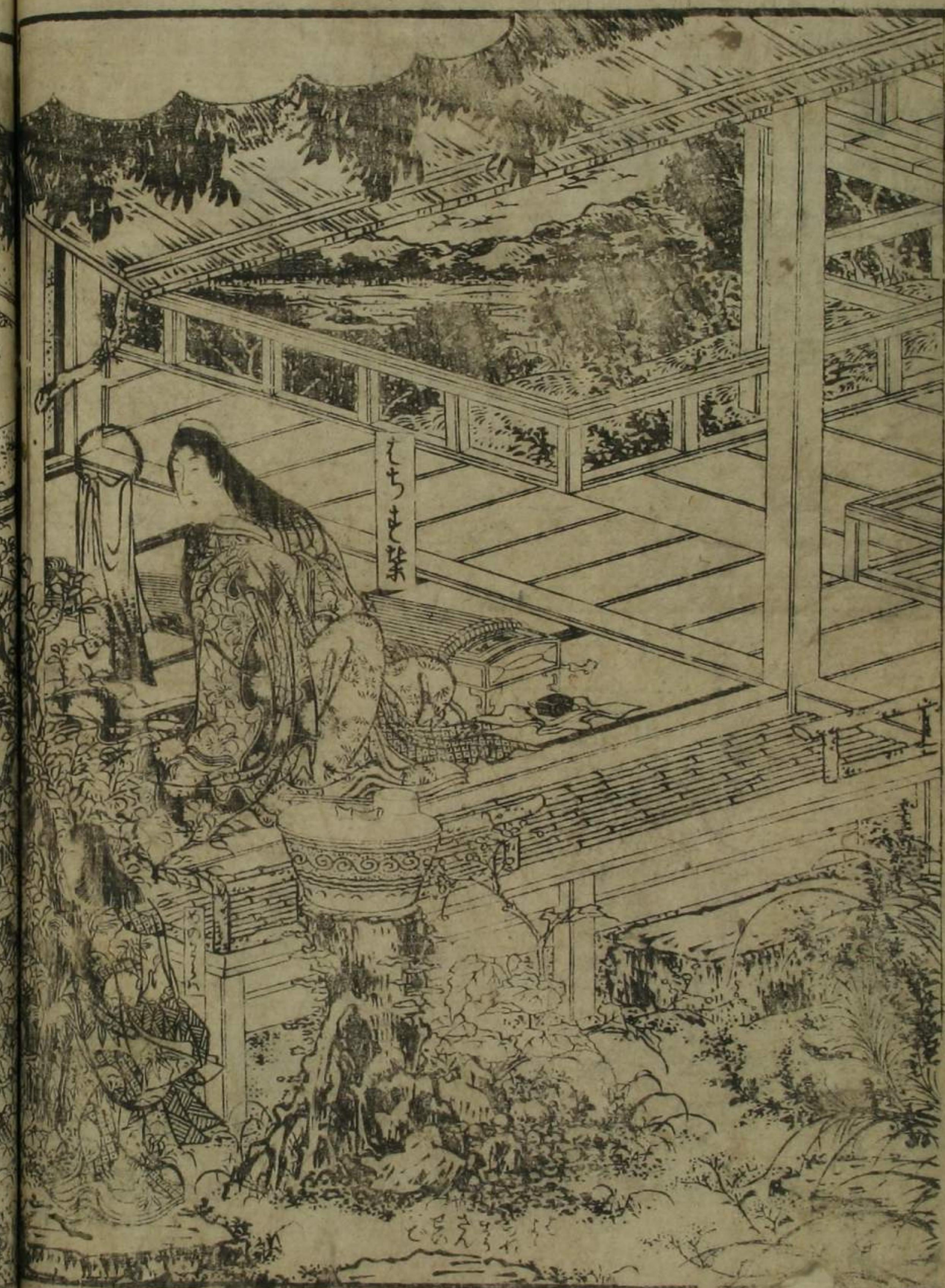
願をも果さぬ。とくひくら。夢てよかうと。師の坊よ告く。身の暇をあつ。親  
きく。うりへり。里へも別れを告。縁をりとも。持津圓。神崎の隣村。父を  
地の真言院といふ。大刹よ没そく。修行。一念希求の志。もく解るとあく。と

小あると。亦七年あまり。されば同宿の法師。むしもくこと。嘆賞。と。もの  
人え。後は。瑜伽成就の行者。ある。乍ら。と。あり。又その才の長。を。婿。と。家業  
もあり。夫始。や。終。あり。の。民聖人。の。まことに。出家。は。其の後。の。生氣  
を坚固。させ。と。り。これ古人の金言。西智。の人面。ゆうの。れを賞美

する。程よ。うき。ゆう。で。や。慢心。蔑。り。後。まへ。人を。人。と。も。も。り。假。初。の。問答。小  
も。經文。を。引。く。い。懲。く。と。う。と。テ。の。増。く。う。と。う。と。を。用。よ。く。あ。つ。け  
く。ば。う。わ。よ。も。似。む。眞。さ。あ。と。こ。憎。く。と。う。と。い。く。へ。ひ。こ。に。も。九。月。の。下旬。西  
智。法。師。ハ。一。月。不。國。學。察。を。立。す。近。の。山。の。腰。を。漫。行。す。よ。ト。ミ。ハ。  
程。よ。染。う。と。錦。を。織。く。り。と。ど。彼。御。室。の。兜。を。そ。み。の。あ。く。刻。し。部  
ふ。あ。理。う。と。ひ。と。由。る。一。言。そ。と。ひ。せ。れ。す。は。彼。此。を。徘徊。す。と。妹。の。

テ西よ傾た尾上を隔て挾牡鹿の牝鳴ふ声も少因うり。こへどひの外よ母  
過一へ今へ退くらんとひとてとらま。後をきくとえくら小念比草の葉のさ  
と動くと行をとて熟視すば収取られよ挾牡鹿のやそめ北を慕ひ未だも  
んとすくよどありぐる。寔小前世の業因よやありぐん。亦父が殺生の惡報小  
やよりくん。西智ひの取容ととくんがうすく。年末の道か五化小失く。然  
うとりりえあんんぐも。うど  
火肚裏よ燃春心眼底よ動た。ほくどを息つなづりよす。天地周輪もあ  
よ。のぞと活ろの男ハ女をめりひ女ハ男を慕ふ。され陰陽自然の理  
す。教ざれどもめづらう知らちるが釈教よ。されうづかと林にて  
事の情よ情もひりふぞや。され不幸みと孤とすりしより。かよもあくぬ出  
家しての煩惱をうとよこと。世の常言よ。和尚ひき中の餓鬼とらむと  
る。すなやか。名山夷山よ住持して。食はの三つよ富とも。すとひのりのと  
う。孰より遺し。孰よりとん。すみだらけ天竺よひどうの山門ありぐり。野  
感すとどうありて。その精を泄しつ。その精草の葉。小かわい。時よ牝鹿未  
みを。彼草を食ぬの鹿遂よ有身よ生るの。形状人よそく。頂よ一つの角生  
く。と援く經文よあり。せよひ一角仙人をきり。ソリバ道のひと高にも。又齡  
の頃。の頃。の頃。の頃。の頃。の頃。の頃。の頃。の頃。の頃。の頃。の頃。の頃。  
庄嚴論よとえ。清水寺の僧が。進命婦よ懸想。ソリバ道のひと高にも。又齡  
遺よあり。志賀寺の朝寛大原野の尼が。どた。もを。是悟の中よ迷を生じ。遂  
極。とて更よ悟の門を開き。遮莫。あくね後の世をくのすとく。今生を  
化。小をもんへいと愚る。所為すり。のが利根よ思はれる。多年の意樂  
をもす。えど。もすが。ひも。忘却し。二世の諸佛を誹謗し。魔業の少坑小陥るとをも。す。物  
をも。念を果さんと。らひえきることを。あよ。され西智ひのゆくとひよ。起も。まし





らむ。人へがくうべーと回答すアビ。アラモミラム邂んとモル成サの奇  
ハ苗アラモド小ゆべど、榮然とらち咲ス。シテミニ忌モレニヒト彼蓮  
葉の君トモす。この花街は全盛だ。ソト、シテの名はえる。にロ  
の君も芳モ桂木也。さるく、小夜もよう。客の数は賃の生砂よ  
倍く。ソト定め未だ有する。あハセんひと稀く有る。彼方より請  
來。ソセヨシトモアリトナレ世の中といふ事も。シテ、假  
の宿りへ滑じ足く。ソト、戯少々。膳く裡よ冊だ。ノホル木から  
木隔々向の方よ。と清く。ナニ。細代天井は屋のうへと累々  
。長押床間の風流。さる唐木。アラモト造れり。調度又備う。す。  
琴棋書画。アラモト飾も。寄鹿社觀ひ。アラモト墨子  
安の室。アラモト画。曾モ上せよ居。アラモト茶を。アラモト  
シムシヤさんと。奥モ吉久めぬ。アラモトありて。アラモト蒸襖と。アラ  
苗奇南えきと。薑く。ソト晴アラ小裝。年紀ハセのう。アラモト  
アラモトアラモトアラモト。西壁がほくう。アラモトアラモト。アラモト  
会新し。アラモト蓮祭と。アラモト聖像を。アラモト席よ迎。アラモト  
モカ。アラモト物うく。アラモトはさん。仏の慈悲ハ穢土を嫌ひぬ。アラモト  
ねがい。アラモト放よ生。アラモト。獨せ相應の要。アラモト夫出離の直路と。アラモト示。ア  
みひね。アラモト。うち咲る。容止。阿末の三十二相。アラモト遙よ。阿末の三十二相。アラモト。西壁を  
あやう。アラモト胸のひくと裏のそく。アラモト應。アラモト背向よ見。アラモト。けい  
な。アラモト。罪障。アラモト。死と。アラモト。後世のいと。アラモト。あく。アラモト。有  
こそと。アラモト。蓮葉。アラモト。うれ。アラモト。心氣を。アラモト。物。アラモト。よ  
ころ。アラモト。暮よ。アラモト。女。アラモト。童。アラモト。障。アラモト。建。アラモト。菊燈。アラモト。小  
時。アラモト。日。アラモト。暮。アラモト。女。アラモト。童。アラモト。障。アラモト。建。アラモト。菊燈。アラモト。小

雲絶間 卷一

小盆をりと出でり。かくて蓮葉わらふ。小盆をあげて竹寧小廟  
へ西行も推辞なく。慢々醉ゑ。其後をあらび袖片あれて卧たれり。是の夜  
その夜じて明よりとど。西行が宿酒ひまく。醒む。蓮葉わらふ。その枕方  
をすうて。聖僧起坐なれど。天へそや明けぬといふ声の。寝耳ふり入りん  
み碧岸破と起てえり。まご。それゐわあじがはす。翠帳紅圍の中へ  
う。こづくと果てて忙然とそりよ不をあらび蓮葉わらふの形勢をう  
聖僧のあらじこあても理る。あまうふ罪うくちほえけれ。今へ縁故をう  
らへべし。疊背こうふを仏するありとヤセハ仍ふと實の人を遊んで  
ひまかへせむよと作り。やのとすみきは怪ともかがまんが。このころまくらの方  
へお頼と未まさる旅人あり。このへん簾倉武士うて形を下に醜く年を  
のと老く。それを厭ふもの。財宝ある者。はは。うり小人の尼へだと  
のうだり。ひりとも朽をくく。その如些との病あり。翌日約束の客ありとてゆ  
そまゆる客をすりとひららて被へを。すやす歸や。草環のひもをうな  
たをぐく。人を済ゆほの誓によられぬとゆきのとえま。独卧あはせ。よ憚の  
國もあり。ひりと帰る。あらゆると物くれ。西行且暮たばれ。数回嘆息し。  
て數回嘆息し。それが寺の清規。嚴重されば。縱一夜もとひふと。俗家  
止宿せ。法師い。再びま門より入へり。さるび柳巷小町。くるとや。らん仰と  
せんと。後悔と。蓮葉もそのと成ゆ。今更。痛しく。西行法師の  
にはよ宿り。性空上人の室積よりよひゆひと。せめ人もよくあり  
候り。よるや柳葉よ卧いかとも。公清くい人も發じ。さゑとみ恨をあひと  
さう。よひひ尉官へ。西行。腰をうち掉す。それよろしく墮す。よども。

誰の星を滅とせん。已さん。今なりよ悔ともひひ。モヤミスベー

モジンとすれば蓮葉も慰めうる。練一匝と境一面をとう出し。こゝ散

きつねどぞうぞうの布施よけり。さるすありとどももうべと聖僧

を苦へやまかしす。みるがゆの罪すと後せいでかほへぬ。よれ小

争れあと練と鏡と贈アタケ。西壁にあまびて。固辞て後彼二品を受納

や。ゆきのとよあがむ。さす前世の悪業ととそく。寧心身を恨むべた様一の

らむ亦もあふべ。とひじうと別れしき。とより互に捨がれんとひありて。蓮がも

行とあく。彼法師の往方ひとすく。名をもすて。处滅も圓めじと遺憾も

ひたり。されど故あるゆうて。因縁一とび仏によつとひども。父が殺生の

惡報小よろ。北懲ふ鹿よ妄念發モ。東小神崎の花街よ醉卧ス。

ゆく菩提のひうどひうど。されば古くも出家いは家後の出家れぬ。限土同小

塔紙脱すとくわらど。その罪却く。倍す小勝ることあり。悲一とよだや。

第二套 杜驥の牛を親

さとも西啓の寺の清規を犯し。ひとく小言禁き。ようや辛どくゆく

あくとく。まの勤も物うとく。古院へ立かず。とすは二日。高畠

の古家よ隠き居て。かくすゑ来しきこのとよひづくよも。家の過

悔一か。只その人の面影のと忘れ。西方淨土の蓮臺ハ移べり

ひとも遙え。それへ流との里よむ。蓮葉こそ意へりれど。惡念更に坐

ませよ。それのとひひとひぶられ。彼又それをらすよあらねど。とひり

それもひる懃す身を胸す。ひもあくとぞ徒よ別れしき。奈、意る

廣雅 卷二

よと。もうあゝもぢひ乱れり。信とこううつむく。こゝまへうがく愚ふ身。誰とも  
んとも。貯禄もまたよひ。まことに。あらび故郷小まくうと。どしき  
うちもやめと尋す思ひ。蓮ふみがあくる練を賣る。路費とう。近はを授  
りもぐる。真言院より。那日西僧が帰らざるをり。次の日人を知て。  
その往方を索問をす。惡夏千里疾走るとり。常言よされど。件の法  
師。神崎の花街小醉卧し。せのゆえを憚る。逐電ちくと風闘す。  
同宿の法師。ちも。ちも。ちも。の風声をすて。啼り笑ひ。彼青道。おまき  
小我慢の鼻をうと。遂よ鬱葉。隋タリ。はす。あす。と  
私語あひ。りか。住持も閣り。して。纏う。近に。の長光寺。消息。一  
縁由を告げ。りか。彼地の道傍。けへゆく。親たしも疎々。も。き。て。告  
あく。ぞ。あほえ。り。ひ。て。西僧の捺津園を。後。うち。づ。く。日。ひ。あく。ね  
近に。路。よ。入。よ。り。る。が。又。よ。す。ぎ。う。往。す。故。御。を。出。つ。と。だ。り。一。山。よ。住。持。一。る。  
綿の袈裟を掛。う。あ。ぎ。れ。再び。歸らじ。と。廣言。ぢ。る。も。あ。る。よ。今。ゑ。散  
勢。よ。く。門。容。こ。と。立。う。ア。後。指。さ。し。り。ん。れ。面。ぶ。せ。う。い。され。が。と。路。限。も  
既。よ。盡。され。ば。あ。は。遠。く。き。ん。わ。ら。よ。ほ。と。ど。と。進。退。こ。く。小  
究。こ。ね。じ。と。と。立。う。ア。後。指。さ。し。り。ん。れ。面。ぶ。せ。う。い。され。が。と。路。限。も  
既。よ。盡。され。ば。あ。は。遠。く。き。ん。わ。ら。よ。ほ。と。ど。と。進。退。こ。く。小  
黄牛あり。野例川を渡。さて。牛。飼。り。彼。處。の。岸。よ。至。す。今。糟。戾。を  
食。し。と。う。す。飢。を。廢。だ。つ。日。と。あ。う。す。あ。る。日。守。山。よ。り。鹽。成。負。べ。て。ゆ  
ぬ。を。そ。く。よ。被。牛。ち。か。一。牛。飼。が。足。を。然。ま。し。己。ぞ。の。時。西。僧。も。か。ひ。下。す  
カ。在。一。が。ど。の。形。勢。と。い。が。り。ま。の。故。を。因。牛。飼。矣。す。され。別。ま。仔。細。あ。る。  
あ。う。ど。う。の。牛。久。く。う。れ。よ。御。する。を。り。ス。の。ふ。凡。畜。類。ら。る。聽。され  
そ。の。友。を。舐。る。あ。の。牛。それ。を。り。そ。友。と。す。ふ。こと。と。い。ふ。西。僧。甚。改。て。け。ふ

さるあらん。抑ひ牛の所。  
されへ対智川のあゆく。うる。牛の牛あり。彼  
人膚を薙。萬の牛を。日每の牛の膚を負ふ。草津等山より  
むきこ牽き。回答もありぬ。渡守衛と船をさし。着れば中有人。  
陸より。陸する人以後まつて乗つる。牛飼も牛と船の牽乗し。西  
も久川をさして。おのがまよ。よううりをめたぬ。ちくよこの日酉賀の道  
まくらふ。御向。黄牛が牛飼の足を蹴り。彼が脚絆に入着る。  
嘘の氣を嘗る。彼恰らまこと。押しう。それこそ。就て謀  
あ。輒く彼牛をひく。落出見と。難倉。起と。赴き。彼处へ元未豊から比  
方と。ゆき。うろこ。皮跡。用もあらず。が故。御らしく呻吟し。あわる人少  
數をあらし。審議したをもれり。木と。ゆき。小も。ぞ。賊ん

明治十六年六月一日  
え、壬辰年六月一日

平文左木白能一吉

卷之三

七言律詩

送人歸蜀

王昌齡

蜀道難，難於青天有白雲。  
但使願無違，歸來不自由。  
白髮三千丈，緣愁似個絲。  
不知明鏡裏，何顏照我頭。

